社会保障

ケアマネが意思決定支援

人生の最終段階の治療「ふくろうプロジェクト」

ゆうゆうLife

多くの人が「いつかは考えなければ」と思いながら、向き合えずにいる「最期のとき」のこと。延命治療を受けるかどうか、本人の意思決定を介護保険のケアマネジャーが支援し、それを救急や医療機関と共有する試みが、千葉県松戸市で始まっている。揺れる心に伴走し、意向を実現できるか、注目される。（佐藤好美）

延命治療どうする

事業は、松戸市医師会、同市高齢者支援課、同市消防局、ケアマネジャー（介護支援専門員）の専門職団体など計9団体で行う「ふくろうプロジェクト」。要介護高齢者の人生の最終段階での延命治療や療養場所の希望を、ケアマネジャーが本人から聞き取って、主治医と連絡を取るなどして文書（ふくろうシート）を作成。さらに、その情報を救急医療や搬送先医療機関などと共有する。文部科学省の研究事業で、30年度までのモデル的な位置づけだ。

松戸市はもともと、在宅医療に熱心な地域。事業を始めた背景には、高齢者の日頃の状態や治療の意向が不明なため、救急現場でどの医療機関に運んで、どんな治療を開始すべきか分からず、搬送に時間がかかっていたことがある。中には、本人の意向が分からないまま延命治療が開始され、穏やかな看取りとはかけ離れた最期に、家族が苦い思いをする事例もあった。

ふくろうシートに記載するのは、住所や氏名のほか、持病や心身の状況▽家族や主治医の連絡先▽延命治療の意向―など。最大の課題は延命治療の意向確認だ。高齢者がイメージできるよう、4つの選択肢が療養場所とともに示されている。

選択肢の1つ目は、心臓マッサージや電気ショックなどを含む延命治療を希望するケース。搬送先には高度な治療を行う大病院が並ぶ。

2つ目は「苦痛を減らす治療や負担のない治療を病院で受けたい」場合で、搬送先には在宅患者の受け入れなどをする病院が並ぶ。3つ目は「苦痛を減らす治療をしながら、住み慣れた自宅や施設で過ごしたい」。4つ目は「決められない」。

「生活」に即して

ふくろうプロジェクトの責任者で慶応大学医学部（公衆衛生学）講師、山岸暁美さんは「最期のときに人工呼吸器や経管栄養をつけるかどうかと問われても、一般の人は選ぶことが難しい。ケアマネジャーが生活の延長で『ご飯が食べられなくなったらどうする?』とか『歩けなくなったらどうする?』と切り出すことで、意思決定の扉を開けてほしい」と期待を寄せる。

実際、人生の最終段階の意向を文書にしている人はごくわずか。厚生労働省の5年前の調査では、一般国民の7割が「意思表示の書面をあらかじめ作成しておく」ことに賛成だが、作っている人はうち3%にとどまる。

山岸さんは「目標は、ふくろうシートを埋めることではない。人の気持ちは揺れるものだから、ケアマネジャーさんが利用者さんと気持ちを共有し、一緒に考えることが重要だと思う」という。これまでに約1千人がシートを作成した。市内の要支援・要介護高齢者の約5%にあたる。

「新しい役割」評価も

高齢者らの反応は様々だ。「そういう話をしなければ、と思っていた。ちょうど良かった」ということもあれば、「そんなこと、決められるわけないでしょう」と一蹴され、ケアマネジャーが「急がなくていいから、娘さんと話してみてね」と、持ちかけても、やっぱり話が進まないこともある。

ケアマネジャーにも迷いはある。「医療者でないのに、意思決定を支援する自信がない」という声の一方で、「人生は医療だけで成り立っているわけではない。生活の中での意思決定支援は大事だと思う」と、新しい役割を積極的に評価する声もある。

松戸市介護支援専門員協議会の原田信子会長は、「日本では、死を考えることは『縁起でもない話』だったが、『おひとりさま』が増える今後に向け、考えてもらうきっかけを、ケアマネジャーが作れるといい」と話している。

「もしバナゲーム」を通して、自身の意向を確認するケアマネジャーら　＝千葉県松戸市

もしバナでトレーニング

千葉県松戸市の市民会館で今月中旬、ケアマネジャーの「意思決定支援研修会」が開かれた。講師は、亀田総合病院の疼痛・緩和ケア科の蔵本浩一医長。

この日は約100人のケアマネジャーが、4人ずつのグループに分かれ、人生の最期にどうしたいかを話し合うためのカードゲーム「もしバナゲーム」に臨んだ。カードは、もしものときに備えた話し合いを、楽しくしてもらおうと、蔵本医長らが作った。

35枚のカードには、「痛みがない」「家族と一緒に過ごす」「ユーモアを持ち続ける」など、異なる内容が記されている。余命半年の想定で自身が大切に思う内容のカードを集めるのがルールだ。

「う～ん。カードを見ると、私って自分中心かも」

「結婚してから、ずいぶん自分が変わったと思う。人の気持ちって変わるよね」

ケアマネジャーらは、手持ちのカードから自身の気持ちを再確認。選んだ理由を説明し、価値観や選択がそれぞれであることも確認した。

ゲームの後、蔵本医長は「誰がどのように（意思決定に）かかわるかによって、相手の選択が変わってしまうことがあるかもしれない。自分の価値観が何かを知り、それとは異なる、多様な価値観の存在に気づくことが（意思決定支援の）第一歩」と語りかけた。

参加した松戸市内のケアマネジャー(62)は、「人の気持ちはその時々で変わると思うし、いろいろな人の価値観があることが分かった。今日の研修はとても良かった」と振り返った。